1・北海道造形教育連盟の研究の概要

(1) 研究主題設定の背景

・社会状況の変化の中で、未来を担う子どもたちには、これまで経験したことのない新たな課題を見出し、それらの最善解を生み出す力が求められる。
・学校教育においては、子どもが「生きる力」を確実に身に付け、可能性を最大限に伸ばすよう、育成すべき「資質・能力」や、そのための「教育目標・内容」「評価」の在り方を明確にする必要がある。
・造形教育においても、「コンテンツ・ベース」的な教育観から、「コンピテンシー・ベース」的な教育観へのシフトが求められている。加えて、一人一人の「資質・能力」の育成を「協働的な学び」の中で効果的に高めていくことも実践していかなくてはならない。

○前次研究「自立と共生の造形教育」とのつながり
・前次研究：一人一人の学びが「自立」することで「共生」の学びが成立（順序的関係）
・今次研究：「発達の最近接領域」（ヴィゴツキー）の考えを基に集団での学びを再考（双方向的関係）

自立的な学び ⇄ 双方向に相乗的に効果 ⇄ 協働的な学び

(2) 研究主題

“わたし”を創る
～今を生きる、共に生きる造形教育～

(3)　2つの研究内容

【研究内容Ⅰ】
“今”“わたし”が生きる造形活動の在り方とは

○子ども自らが選択し自己決定していく主体的な造形活動を通して新たな見方・感じ方・表し方を獲得し、自己を更新していくというこれまでの研究の内容に加え、造形教育で育まれる固有の資質・能力だけではなく、汎用性のある未来に生きて働く資質・能力の育成をめざす。
（例）
・作品主義・画一的な指導ではなく、資質・能力育成を中心に据えた子どもが主体的に学ぶ授業
・自己流ではなく、バランスのよい題材配置によるカリキュラム構成

↓

新たな見方・感じ方・表し方の獲得

【研究内容Ⅱ】
“わたし”が高まる“共に生きる”造形活動の在り方とは

○発達の最近接領域における協力者は成長に伴い親や先生から仲間に置き換わってくることを考えると、協働的な学びの在り方には発達ということが大きく関係している。また、子どもの必要感から生まれる協働的な学びが成立していないと、お互いに自立を促す学びにはならないと考える。
（例）
・子どもの発達段階の把握
・材料や用具、発想や技能の抵抗感
・題材の目標の設定
・造形環境の設定
・時間や場所の保障

最近接領域の設定

↓

協働的な学びへの必要感の生成

↓

自立のサイクルの生成

↓

“わたし”の更新

↓

未来をより良く生きる資質・能力の育成

2・札幌市造形教育連盟の研究の概要

(1) 研究の経緯と目指す造形活動

・札幌市造形教育連盟では，北海道造形教育連盟の研究を踏まえ，子どもが自分の思いを，自分の形や色などに表しながら，「つくりだす喜び」を味わう授業の実現を目指してきた。
・研究を通して，「つくりだす喜び」は，子どもたち一人一人の自ら（自律的に）働きかけた度合い，つまり，いかに主体的に学んでいるかによって左右されると考えるに至った。
・そこで「自ら働きかける（自律的）な造形活動」を保障することによって，子どもが「つくり出す喜び」を味わうとともに，感性をより豊かにし，形や色との関わりを通して，自分自身がよりよく生きようとすることにつながると考えた。

(2) 目指す子ども像

・子どもが自分の身の回りの形や色などに対し，感性を豊かに働かせながら関わろうとする姿は，学習活動のみならず日常の生活場面においても見られるものであり，これは幼少期から就学後の図画工作科・美術科まで貫く学びの姿である。
・そこで，目指す子ども像を「形や色などを通して，よりよい生活をつくり出そうとする子ども」とし，この子ども像を実現する学びが，「“わたし”を創る」学びであると考えた。
・この学びを実現するために，子どもが自ら対象や事象を造形的な見方・考え方で捉え，自分なりのイメージをもち，意味や価値をつくりだす「感じる＝考える＝表す」造形活動を展開する必要があると考え，研究主題として設定した。

(3) 研究主題

この子が　感じる＝考える＝表す　造形活動
～造形的な見方・考え方を豊かにする学びを通して～

(4)「もっと！」を生む題材の設定

・主体的に造形活動に取り組むために，「もっと！（自ら対象に働きかける力を発揮するための表現や活動への欲求)」という思いを子ども自身が生む題材を４つの視点から設定した。

視点①「もっと！」を生みだす教材化

・子どもが発揮する資質・能力を想定する。
・子どもの選択の幅を広げる。
・対話的な学びの中で子ども一人一人が意味や価値を創造するようにする。

視点②「もっと！」が連続する活動構成

・子どもが自己との対話や他者との関わりから，意欲を高めていく活動を構成する。
・既習を生かした活動や材料・用具の扱いを身に付ける学習過程をデザインする。

視点③「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り

・一人一人の“この子”のペースでの振り返りを保障する。
・自己内対話で終始することなく，他者との対話的な振り返りの活動を位置付ける。

視点④「もっと！」を高める学習評価の工夫

・子どもが表現の工夫などについて語っていることに，教師が共感的に寄り添う。
・子どもの表現意図と造形的な視点や活動の意味などを関係付け，子どものよさや可能性を認め，それらの更なる発揮を促す。